

首輪付きの巫女

目次

少女の領分	六
罪あるいは罰	六七
とりかえばや	一一九
紅灯緑酒の君に	一五四
ハロー・ハロー・ハロー?	一八三
奇跡について	二一四
おしょうがつ	二四五
(a piece of) cake-walk	三〇四

登場人物

博麗霊夢

楽園の素敵な隷奴。外で風俗嬢をしていたころにご主人様と知り合い、現在は幻想郷で半同棲状態の爛れた生活を送っている。前後とも非処女。

東風谷早苗

皮相浅薄な新入り性奴隷。同じくご主人様とは外で風俗の仕事をしていた時からの付き合いだが、後ろだけ非処女。

比那名居天子

本作では名前のみ登場。「比那名居天子調教日誌」でご主人様のもとに押しかけ性奴隷をしていた時に巫女二人とは面識がある。前後とも非処女。

ご主人様（僕）

外にいた頃に風俗で知り合った霊夢にガチ恋した挙句幻想入りし、現在は神社の近くに家を借りて半同棲生活を送っている。実態としては博麗神社の庇護下にあるヒモ野郎。気分が乗ると一人称が「俺」になる。

※本作の設定は過去作を引き継いでいますが、知っておくべきことはだいたい以上の通りです。もちろん、過去作を読んでいただくと作者が嬉しなります。

諸注意

- ・ 百合ちゅっちゅ本ではありません。仲良しハーレム本です。巫女さんたちのあいだにちんちんが挟まります。
- ・ 挿入は大体（9割がた）お尻えっちです。
- ・ おもらし、飲尿、浣腸などのスカトロジー描写が含まれます。
- ・ 縛り、浣腸、異物挿入、お尻舐め、ゴムなし生アナルセックスなど安全上・衛生上のリスクがある行為の描写が含まれます。本書に登場する女の子は特殊な訓練を受けています。真似しないでください。
- ・ この本の登場人物は全員お酒が飲める年齢です。
- ・ キャラクター及び幻想郷に関する独自設定が含まれます。優しい目でご覧ください。解釈違い、設定ミスなどありましたらやんわりとご指摘ください。
- ・ 人の数だけ幻想郷。

以上、ごゆるりとお楽しみください。

“そして天然の花園のような自分の心までも彼に与えてしまう、人工的な手入れの行きとどいた花園しか愛しえない彼に。こんなことで、そのほか者が、王女様を、奴隷にして連れていってしまおうというわけあいになる。”

—アントワーヌ・ド・サン＝テグジュペリ

少女の領分

我が身の不運を呪うべきか、幸運を言祝ぐべきか。縁側に座って昏くなりかけた境内を眺めながら、僕はおのれを省みていた。

「……ごめんなさい」僕の肩に後ろ頭を預けたまま、霊夢が鼻をすする。「取り乱した」顔はよく見えないが、声が腫れぼったい。やり場のない罪悪感が胃の底のあたりに溜まってきて、僕は天を仰ぐ。

「……何もなかったよ」
「知ってる」

何もなかった。自分に言い聞かせながら、僕は膝の上で眠っている早苗の、寝乱れた髪を手で梳いた。乾いた涙が、目尻のあたりにかすかに塩の筋を作っている。

霊夢が留守の間に、早苗が来た。並んで縁側に座って、ぎごちなく話をしていた。外にい

たときのこと、幻想郷に来たこと、霊夢のこと。それだけだ。

「知ってるわよ、でも」

言葉を選んでいるのだろう。珍しく、一言一句を区切るようにしながら、霊夢がつぶやく。

「……自分でもよくわからない。なんであなたと早苗が話してるだけで、涙が出てきたのか」

「すまない」

「謝らないで」

肩を巡らして、視線だけが僕の方を見る。

「それに、何かあったとしても……私が口をはさむ義理はないわ」

口元だけが、どこか寂しそうに笑っている。

「……それは違う」

「そう?」

背中を丸めたまま、僕は天を仰ぐ。遠く山際の方で、陽が沈もうとしていた。

「何笑ってんのよ」

視線だけをこちらに向けて、霊夢が声をとがらせる。

「あ？」

ほおに手を触れる。自分でも気づかぬうちに、口角がゆるんでいた。深く息を吐き、僕は肩をすくめる。

「君が泣くのは、珍しいな」

「そうね。私らしくないわ」

言葉が途切れる。そのまま、僕も黙って山際の空が茜から藍へと変わっていくのを眺めていた。

「……ごめんなさい」

「君が謝るのも珍しいな」

「真面目に聞いて」

口を閉じる。

「あなたがこっちに来てくれたの、うれしかったから」

淡々と、一語一語区切るように、霊夢は言った。

「だから、あとは何も言わない。あなたの好きにすればいいわ」

不運などとよく言えたものだ。我が身の幸運をかみしめながら、僕は静かに息を吸い、吐く。

「ありがとう」

「水臭いわよ、そういうの」

背中の後ろで、霊夢が小さく肩をすくめる。

「……あなたが決めて」

「ん」

「あなたが決めたなら、それに従うわ」

んん、と低くうなりながら、僕の膝の上で早苗が身じろぎした。僕たちの話していることが聞こえているのか。あるいは、もう目は覚めていて寝たふりをしてきているのか。

「この子はあなたに会いに来たのよ」

「そうなのか？」

背中あたりをなでてやると、再び早苗は不規則だが穏やかな寝息を立てて、膝の上で泥に戻った。

「……早苗が見ているのは、君じゃないのか」

霊夢の話をしているときの早苗は、いつも楽しそうで、笑っていて。外にいたときも、記憶にある彼女はいつも霊夢のことを話していた。だから、そうなのだと思っていた。思おうとしていた、というべきか。

「本気で言ってる？」

霊夢はこちらに向き直ると、まじまじと後ろから僕の顔をのぞき込んだ。

「朴念仁」

「は？」

「唐麥木、鈍感、おたんちん。あー……泣いて損した」

「なんだよ……」

肩の辺りからこちらを見上げながら、霊夢はあきれ顔で口をとがらせている。

「君が心配するほどもてやしないよ」

「そういう話じゃないのよ」

そこまでうぬぼれるつもりはなかった。彼女が、博麗霊夢が僕のそばにいただけで、すでに一生分の運を使い果たしてもまだ足りないのだ。それ以上のものを望むとしたら……それこそ、奇跡でも起こらない限り。

「……大丈夫」

僕の肩に頬を預けながら、霊夢は穏やかに笑う。

「ひとの男だからって欲しがるような、底の浅いやつじゃないわ。それは私が保証する」
かすかに声が、小さな肩が震えていた。

「……彼女のことを好きなんだな、君は」

「かもね」茜色の残照に照らされて、その横顔はどこか遠くを見ていた。「嫌いではないわ」
「……俺を見ろ」

無言のまま、霊夢は目を伏せ、しばらくうずくまるように眠る早苗の髪をなでていた。やがて、ためらいがちな視線がおずおずと僕のほうを向く。

「一つ、最後に聞く」

不安と、わずかなばかりの期待とをにじませて、潤んだ瞳が僕を見る。そのまま抱き寄せたくなるのを押さえて、僕は続けた。

「この娘と一緒に、俺の前に這いつくばりたいか」

霊夢は無言のまま、じっと僕を見ていた。黄昏の空を映してか、あるいは。僕はほのかに色を帯びた頬に、手を伸ばす。

「二人で顔を並べて、俺のチンポをしゃぶる。できるか」

「……はい」

穏やかな声が答えた。頬の上で、小さな、柔らかな手のひらが僕の手の上に重ねられる。

「ご主人様がお望みなら、如何様にも」

「そうか」

もはやそのまなじりに不安の色はない。視線はほのかに熱を帯び、まっすぐに僕の方を向いていた。

「ありがとう」

「いえ」

ふふ、と僕は笑みを交わし、二人して膝の上に転がる眠り姫に目をやった。

「なら、あとは彼女が決めることだ」

「ん……んんー……?」

「起きたか」

薄暗い蔵の片隅。低くうめきながら、早苗は目を覚ます。重たげに押し開かれた瞳に何が

映っているか、想像するだに愉快で、無意識のうちに下腹に力がこもる。

「はあうっ」

腹腔を下から押し上げられた霊夢が、背中をのけぞらせながら甘やかな悲鳴を立てる。膝の上で跳ねる腰をぐっと抱え込み、その耳元に口を寄せる。

「……かわいそうに。あまりうるさくするから、目を覚ましてしまったぞ」

「だって……」 ほどほどの媚態を込めて、霊夢が口をとがらせる。「我慢っ……できっ……やつ、あっ……」

小刻みに嗚咽を漏らす肩の向こう。早苗は夢とうつつの境界に片足を残したまま、ぼんやりとこちらを見ていた。

「……え、あ、えっ……？」

眠たげにこすっていた瞳が薄明かりになれば、焦点を結ぶにつれて、早苗の表情が目映る光景に凍り付く。

「へ、あ………いったい……？」

その後は、声になっていなかった。ただ、唇だけが言葉にあわせて引きつったように形を変える。

「いったい。いったい、なにを。なにをしているの？」

「なにをしているのか、だとさ」

意地の悪い喜びに口角がゆがむのを感じながら、僕は霊夢の耳元に口を寄せる。

「……教えてやれよ。何をしてるか」

「何、って……っ」僕の方に体重を預けたまま。早苗の方を振り返りもせず、霊夢は答える。「っ奉仕っ……んっ……」

「ちゃんと教えてやれ」

早苗には見えているはずだ。向かい合って座る僕らの間。ぬちぬちと粘ついた音を立てながら、怒張した陽根が少女のたおやかな双臀の間に消えては、また現れる。まるで手品のよう。

「お尻っ、で……ごしゅじん、あっ、さまっ……おちんぼっ、にっ」

霊夢はといえば、赤いリボンと黒い革の首輪以外に身につけるものどてない、いっそ全裸の方がまだ奥ゆかしい姿で、腰をくねらせている。白くなめらかな双臀の間、排泄のための秘めやかな開口部が、オスの生殖器を飲み込んで、またひり出してを繰り返す。ただ快樂のために。

「ごほうっ、しっ、して、ま……すっ……んあっ……!!」

白い首筋に汗の珠を浮かべながら、霊夢がろれつの回らない舌で口上を述べる。自ら口に
した言葉に酔わされるように、一言一句を述べるたび押し広げられた尻穴がきゆうきゆうと
うごめき、陽根の一番太い部分を絞り立てる。亀頭を絞り立てる、熱くとろけた粘膜の快楽
と、しとやかな唇から卑猥な口上を述べさせる後ろ暗い征服感に、背筋がぞわぞわと粟毛立
つ。

「奉仕とはなんだ？」

「おひっ、お尻の穴……に、ごしゅじんさま、の……お情け、をっ」

「お情けじゃ彼女にはわからんぞ」

「ひうっ……!!」

抱え込んだ腰を抱き寄せ、剛直をずりりと直腸の最奥へとねじ込む。霊夢は振り乱した髪
の先から汗の珠をほとばしらせながら、甘やかな悲鳴を立てて背中をのけぞらせた。

「お尻の穴、にっ……!! お精子を、頂きます……ッ!」

「尻の穴は入れるところか？」

「ちがっ、ひっ、まっ……!」

「だが博麗霊夢の場合は違わない、そうだな」

「はひっ……」

僕はそこで腕の力をゆるめた。僕の肩にしがみつくようにして、ぱくぱくと口を開いて喘ぐ霊夢に、顎で背後を指し示す。

「博麗霊夢……の、お尻の、穴は……」

初めてそこにいることに気づいたかのように、霊夢は薄闇の中にうずくまるもう一人の巫女を振り返り、笑った。

「おちんぼを入れる、穴です」

嫣然と微笑む霊夢の視線に、吸い付けられたように尻穴への凌辱を見つめていた早苗はびくっと身を震わせた。

「そうか」

それきり、再びそこに早苗がいることを忘れたかのように、霊夢は僕の方にしなだれかかる。その背中をあやすようになでながら、僕は耳元でささやく。

「尻の穴で何度気をやった」

「入れて頂いてすぐ、一度……と……」

「はい」

動きやすいように腕の力を緩めてやると、霊夢は膝で体重を支えながら、わずかに腰を浮かせた。尻穴でつながったままの陽根が、ずるりと抜けるぎりぎりまでひり出される。

「んっ……」

しがみつくように僕の首筋に腕を回しながら、霊夢は肛門に啞え込んだ陽根の一番太い部分を探る。

「あっ、かはっ、んあっ……!!」

「くっ」

やがて、括約筋の最も狭いところが陽根の一番太い部分をこすり立てはじめる。押し包むように絞り立てる柔肉の感触に、腰骨のあたりでくすぶっていた射精感が一気に立ち上る。

「あっ、あっ、あっ」

「ぐっ……んぐっ」

浅く小刻みに腰を使いながら、霊夢は陽根の一番敏感な部分をこすり立てる。幾度となく精を吸い、性器以上に使い込まれた尻穴が、的確に射精をあおり立てながら、自らも上り詰めていく。

そして、何より、口にこそ出さないが「見られている」という感覚が、僕らの劣情をいや増していた。

抽送のたび、少女の肛門と赤黒い肉の塊の間から生臭い熱気が立ち上り、あたりに立ちこめていく。その臭気に当てられたかのように、早苗はじつと焦点の合わない目で尻穴交合を見つめていた。

早苗の見える前で霊夢を抱くのは初めてではない。早苗自身、アナルセックスの経験もある。だが、外にいたときは「仕事」という立て付けがあった。だが、今は。

「んっ、あっ、がっ……！！ かはっ……！！」

「ぐっ……！！」

けだものめいたあえぎ声を立てて、霊夢が背中を震わせる。腰骨のあたりが甘く痺れ、最後の一突きに備えて剛直が膨れ上がる。限界が近いと、互いに知れた。

「出す、ぞッ！」

「ッ……！！」

腰を抱え直し、最後の一突きを送る。声にならない悲鳴をほとばしらせながら、唇だけが「来て」と告げる。直腸の最奥で、白い火花がはじける。

「あ、あ、あはっ……?」

尿道を走り抜ける精水が、脈動するたびに充血した肛門粘膜を押し広げる。痙攣する括約筋が尿道から精液の最後の一滴までを絞り出すように、ぎちぎちと陽根の根元を締めあげる。

「んっ……抜け……ちやつ……」

まだ硬さを残した陽根が、てらてらとぬめる尻穴からひり出される。支えを失ったように霊夢は僕の上から滑り落ち、床の上に力なくへたり込んだ。

「……気持ちよさそうだな」

「あ……う……」

「尻の穴に精子を注がれてよがるのは勝手だが、それではどちらが奉仕しているのかわからん」

床の上で突っ伏していた霊夢の視線が、あぐらをかいた僕の真ん中で硬さを失いつつある陽根の上を泳ぐ。

「奴隷らしく礼儀を尽くせ」

快楽に蕩けた頭を振って、霊夢はおずおずと僕の股座に顔を寄せる。尻穴からひり出され

たばかりの、まだ湯気が立っていきそうな肉棒は、粘液にまみれてらと光っていた。排泄物の不快な異臭はなく、精液と腸液の混じり合った生臭い匂いだけがあたりには肛門性交の残り香を漂わせている。

「……ご奉仕、つかまります」

何の銜いもなく、柔らかな唇を割って鮮やかに赤い舌が肉棒へと伸びる。射精の後で興奮の潮は引いていても、肛門の強烈な締め付けに鬱血した海綿体にぬれた舌が心地よい。

何よりも、尻の穴にねじ込んだの陰茎を丹念に丹念に舌で奉仕してもらうこそばゆさに、愛着と征服欲のない交ぜになった満足がわいてくるのを感じた。

「見ているか、早苗？」

少し離れたところで、早苗は熱に浮かされた犬がお預けを食らったような顔で霊夢を見ていた。

「これが奴隷の仕事だ……そんなに物欲しそうな顔をするな。舌が出ているぞ」

無意識だったのだろう。霊夢の口淫奉仕を模倣するように、緩んだ口から舌がのぞいていた。

「欲しいか？」

僕は早苗に笑いかける。早苗はうなずくでも返事をするでもなく、無言のまま吸い寄せられるように僕らの方にじり寄った。

ぴちゃぴちゃと水っぽい音を立てて、柔らかな肉の塊をすすする霊夢の隣。早苗は同じく這いつくばるようにして、顔を近づける。そして、舌を伸ばした瞬間。

「……だめよ」

霊夢は早苗の肩をつかんで、僕の股座から引き離れた。

「これは私の仕事。あんたには早いわ」

「だ、そうだ」

もの悲しげに視線で何かを訴えながら、それでも早苗はおとなく引き下がる。膝の間に手を挟んで、舐られる犬のように座るその姿に、僕は鷹揚にうなずいてみせる。

「もうそのあたりでいいだろう」

柔くなった陽根を口の中で転がしていた霊夢が、名残惜しげに顔を離す。その背中に腕を回し、再び膝の上に抱き上げる。

「ひどい匂いだ」

「んっ……」

背けようとするとする顔を押しさえて、唇に顔を寄せる。

「なにを唾えこんだらこんな匂いがするんだ？」

「お……」

答える暇を与えずに、後ろ頭をつかむようにして唇を吸う。

「んっ、んーっ……！」

絡めた舌をストローのように使いながら、聞こえよがしにじゅるじゅると音を立てて、唾液を吸い立てる。熱く潤んだ口腔に残った、えぐみと苦みのない交ぜになった残滓をあらかた吸い尽くすと、舌尖にはさらりとした少女の唾液の甘さだけが感じられる。

「ぷはっ」

荒く息を整えながら、鼻先が触れあう距離で霊夢が僕を見る。潤んだ瞳から絶頂後のけだるさは消え、次の期待に震えている。

「霊夢」

「はい」

「少しばかり、情けをかけてやるか」

「……です、が」

「ああも物欲しげにされていると、見ていて哀れだ」

腰に回した腕を伸ばし、指の先で尾てい骨のかすかな膨らみをなでる。くすぐったげにみをよじらせながらも、霊夢は僕の意を察した。

「……見える？」

片手で器用に尻たぶを割開きながら、霊夢は背後を振り返る。たった今ペニスで犯されたばかりの肛門を、同じ年頃の少女の前にさらけ出しながら、その顔はどこか勝ち誇ったように誇らしげにすら見えた。

こくん、とつばを飲む音が薄闇の中に反響し、やがてためらいがちに早苗は口を開く。

「……はい」

「そう」

「あの……」

取り澄ました視線を返す霊夢に向けて、早苗は居すまいを正す。

「舐め……でも、よろしい……ですか？」

ひとこと、ひとことを区切るようにしながら声を震わせてようやく述べると、早苗は霊夢の尻から僕の方に視線を移した。緊張と期待に口の端をゆがませながら、じつと許可が出る

のを待っている。

「服を着たままでか」

「……!!」

ぴく、と早苗は身をそばだたせる。

「汚れるぞ」

僕、そして霊夢。せかすでもなく、鷹揚に笑みを浮かべてみせる二人の前で、早苗はおずおずと着衣の襟に手を伸ばす。ブラウス、筒になった袖。スカート。一つ一つ丁寧にあたんと床の上に重ねていく。飾り気のない白一色の下着を上下とも脱ぎ去ると、もはや身にまとうものは蛇と蛙をかたどった髪留めを残すのみとなった。

「隠すことないわ」肌に触れる外気の肌寒さに、心細く身をすくめる早苗に、霊夢は屈託なく笑ってみせる。「綺麗よ」

「あ……ありがとう、ごきます……」

ほのかに頬に紅をにじませながら、まんざらでもないといった風に早苗は口ごもり、再び膝をそろえて座った。

「……早苗、の」

床に手を突き、髪が床に触れるのもいとわずに頭を下げる。

「早苗の舌で、霊夢さんのお尻の穴にご奉仕させて……ください」

「……いいだろう」

平伏して口上を述べる早苗から、霊夢に視線を移す。尻を僕に抱かせたまま、霊夢も同じく満足げにうなずき返す。

「おいで」

「はい」

膝立ちでこちらににじり寄ると、早苗は霊夢の尻の間に顔を埋めた。

「んふ……」

ぴたぴたと水っぽい音を立てて舐め立てる舌の動きに、霊夢はくすぐったい吐息を漏らす。つたなくも熱心な早苗の舌使いに身をよじらせる霊夢の首根っこをとらえて、再び僕は唇を重ねた。

「んーっ……!」

「んちゅ……ちゅっ」

入り口と出口とを同時に舌で塞がれ、敏感な粘膜を責め立てられながら、霊夢は目をうつ

ろにとろかせながら背中をのけぞらせる。

「美味いか？」

唇を霊夢から離し、ちろちろと犬が水を飲むように舌を這わせる早苗に問う。

「はい」

とろりと目を潤ませて、早苗は尻の谷間に顔を埋めたまま視線をあげた。

「お尻の穴、おいしい……です」

「そうか」僕の肩に顎を預けて、荒く息をつく霊夢の後ろ髪をなでる。「よかったな」

奴隷の世界では論理が転倒する。あるものはペニスで犯され、精液をあふれさせた尻穴を

自慢げに見せびらかし、別の誰かはその尻穴をなめるために平身低頭して糞こいねがう。

可憐な少女たちが繰り広げる倒錯的な痴態にほの昏い満足を覚えながら、僕はへその下で

再び劣情が鎌首をもたげるのを感じた。

「霊夢」

「……はい」

「どう思う？ 彼女は使えるか？」

肛門を舐め立てられるこそばゆさに身を震わせながら、霊夢は背後を振り返る。

「ご主人様にご奉仕するには、力不足かと」

「……」

早苗は奉仕の手を止め、すぐるように霊夢を見上げていた。

「お尻の穴で、最後まで気をやったこと……ないでしょ」

「……！！」

「ただ使って頂くだけじゃなくて、ご主人様に喜びを与えて頂くの」うなだれる早苗に、霊夢は嫣然と笑みを向ける。「お情けを頂くとするのはそういうことよ」

「そういじめてやるな」

「あんっ」

唾液でぬらぬらと濡れそぼった霊夢の尻穴を、指でひと撫でする。

「君と比べたらかわいそうだ。ここまでのケツ穴はそうそうない」

「んっ……あつ、恐れっ、入りますっ……」

「だがどうだ？ 彼女も経験を積めば、あるいは」

「……ご主人様が、お望み……なら」

「面倒を見てやってくれ」

「……承知、しました」

猫のようにするりと僕の腕から抜けると、霊夢はうずくまる早苗の背中に覆い被さるように体を寄せた。

「見てあげる。ご主人様にふさわしい穴かどうか」

「……ッ！」

音もなく霊夢は早苗の尻に顔を埋め、ひくひくと震えるすぼまりに舌を突き立てる。そのまま、ねじ込むように尻穴を舌でねぶりながら、早苗の足を割って柔らかな下腹部に指を伸ばす。

「ふふっ……臭あい……」

尻の穴にねじ込んでいた舌を離し、霊夢が聞こえよがしに鼻をすんすんと鳴らしてみせる。股座の匂いを間近で嗅がれる羞恥に身をこわばらせながら、それでも早苗は健気に尻を突き上げた格好のまま身を伏せていた。

「お尻の穴じゃないわ、こっちの方よ」

「ひっ……」

霊夢の指が秘唇を割ったのだろう。ぬち、と粘ついた音があたりに響く。

「生娘の匂いがぶんぶんするわ」

「あうっ……」

指でこそばゆいところを撫でられる快樂と、まだ清らかなままの秘所をもてあそばされる恐怖に、早苗は声を漏らす。

「でも、変ね」指で柔らかな下腹を嬲りながら、霊夢は再び早苗の尻をこれ見よがしに嗅いでみせる。「こっちの穴からは男の人の精液の匂いがするわ」

「はう……」

「どうしようもない変態ね」

「あまりいじめてやるな」

霊夢は、羞恥に震える早苗を愉快気にいたぶっている。まるで猫が小動物をおもちやにしているようだ。

「ケツの穴から男の味を覚えたのは、霊夢も同じだろう」

「はい」

秘唇をくじる手を休めずに、霊夢はこちらにうなずき返した。

「……へ、へん……たい、ですか……?」

「そう、変態。私も、あんたも」

「おずおずと、早苗は目を上げる。霊夢はその耳元に顔を近づけ、ささやく。

「霊夢さんも……?」

「そう。女として愛していただく前に、おしりの穴から味を覚えてしまうような変態は、

はしため
婢としてご主人様に仕えるしかないの」

早苗の耳元に口を寄せたまま、霊夢のしなやかな指が反対から早苗の秘蕾をこじ開ける。

「あんたも、私もよ」

「ひぎっ」

前後から指で二穴をこじり立てられ、早苗は悲鳴を漏らす。同じ女だからか、あるいは身をもって加減を知っているからか。遠慮会釈なく責め立てる指使いは、こちらが見ていて心配になる。

「あまり手荒にするなよ。何せまだ未通女おぼこだからな」

「心得ております」心外だというふうには、霊夢はわずかに結んだ口に力を込める。「どこまで

したら破れるかぐらいは承知しておりますわ」

「ならいい。俺の好みは知っているな」

「お尻が上手な生娘」

「その通り」

霊夢はこやかに微笑み、指で前後から責め立てたられたままの早苗に顔を近づける。

「んっ……」

「んむっ」

差し出された舌と舌が絡まり、唇に唇が重なる。先ほどまでペニスと尻の穴とを舐っていた唇で一心に互いを吸いたてながら、少女たちは交尾する蛇のように絡まりあう。

「……んあっ、あっ……」

やがて、早苗は床にうずくまったまま、ふるふると白い背中を震わせはじめた。

「……イけそう？」

耳元でささやく霊夢に、早苗はたた切羽詰まった表情でこくこくとかぶりを振る。

「なら、ちゃんどご報告して」

「……」

「その方が、気持ちよく気をやれるわ」

「……い、いっちゃいい、ます……ち」

目尻に涙をたたえながら、早苗は僕を見た。

「指でっ、おしりと、おまんこ、いじられて……いき、ますっ……イッて……イかせていた
だいて、よろしいっ、でしようかっ……」「少し待て」 泣きださんばかりに顔をゆがませて
哀願する早苗の前に、僕はどっかと腰を下ろす。「ちんぼ無しで気をやらせるのも無粋だろ
う」

「あ……」

すっかり勢いを取り戻し、鈴口に先走りの透明な珠を浮かべた陽根を目の前に突き付け
る。促すまでもなく、早苗は口を開けて、怒張した生臭い肉の塊を口腔へと受け入れた。

「啜えているだけでいい。歯を立てるなよ」

言われるがまま、早苗は口いっぱいペニスを含む。下半身からたちのぼる甘やかな快楽を
こらえていながら震えているその様は、口淫というにはあまりにもぎこちないが、それで構
わない。

パプロフの犬と同じだ。絶頂の快楽と雄の性器の匂いを対提示することで、記憶が分かち

がたく結びつく。やがて、匂いを嗅ぐだけで股を濡らすようになる。

「失礼のないようにね」

「んむっ、むぐっ……!!」

耳元でささやきながら、霊夢が早苗を指で責め立てる。吐息が耳朶の産毛をくすぐり、しなやかな指がはらわたを内側から撫で上げるたび、早苗は肉棒でふさがれた口の端から泡を飛ばして身を悶えさせる。

「……来そう？」

ぎゅっと目をつぶり、早苗はかくかくと小刻みにかぶりを振る。震えるその背中をいつくしむのように頬を寄せながら、霊夢は絡めた指を一気に肛穴から引き抜いた。

「……ッ……!!」

糸が切れたように、早苗は尻を突き出したでまま床に突っ伏した。

「いいぞ」

祈るような格好でひれ伏す早苗の顎を持ち上げ、こちらを向かせる。弛緩した唇からずりと抜けた陽根が、勢い余って鼻先を叩く。

「最後まで啞えて離さなかったな。上出来だ」

「あ、あ……」

早苗はうつろな目で左右に揺れる陽根を追いながら、声にならない声を震わせる。緩みきった口元が、笑っているように見えた。

「どうだ？」

「十分かと」

尻穴から引き抜いたばかりの指をこれ見よがしに舌で舐めてみせながら、霊夢がうなずく。

「いつまでへばっている？　ここからが本番だ」

のろのろと、早苗は首をもたげる。その後ろで、霊夢が口の中にためた唾を早苗の尻に滴らせる。

「早苗の……お尻の、穴……」

生暖かい唾液が、なじませるように柔らかな双臀の間に塗り込められる。ふるふると肩を震わせながら、すがるように早苗は僕を仰ぎ見ながら口上を述べ立てる。

「お尻の穴、使って……ください……ませ……」

「嫌だといったら？」

消え入りそうな声で自らの肛門を差し出す早苗に、僕はつとめた酷薄さで言い放つ。

「……穴奴隷ならどうしようもない好き者が一人、もういるんでな」焦燥しきった早苗と、意を得たりとばかりに口角を持ち上げる霊夢を順繰りに見かわし、僕は肩をすくめてみせる。「ケツの穴の具合はいいが、いくらハメてやってもハメ足りんらしい」

「……そんなんっ」

「だが、君がうっかり僕の上に座るのは……君の勝手だ」

思いつめたように揺れていた瞳の焦点が、屹立する陽根の先端で像を結ぶ。こくん、と白い喉が揺れる。

「使い比べてほしければ、自分でハメろ」

「……はい」

おずおずと、早苗は体の向きを変え、こちらに尻を向ける。

「今から……うっかり、ご主人様の上に座ってしまいます、ね……？」

濡れそぼった秘蕾が見えるように、早苗は自らの手で尻たぶを押し開いてみせる。

「早苗のお尻の穴……ご覧になれますか」

「ああ」

じつとりと湿り、薄明りを暗緑色に鈍く照り返す秘毛の列。隠すというよりは輪郭を強調するように、申し訳程度に秘唇から尻の谷間の方へと続いていく繊毛の間で、ひくひくと暗紅色の窄まりが蠢いている。

「物欲しげにしているな」

「んっ……」

排泄器官をぎらついた視線に曝したまま、早苗はじりじりと膝を浮かせてにじり寄る。肩越しにこちらを見返る横顔に先ほどまでの焦燥はない。自ら陽根へと尻を向け、雄の性器を腸内へと受け入れる……背徳的な状況への期待に震え、瞳は爛々と鈍い光を湛えていた。

「霊夢」

「はい」

「支えてやれ。うっかり違う穴の方に座られても困る」

半歩程離れて控えていた霊夢が、するりと早苗の膝を割って正面に滑り込む。

「ちよっと、待って」

「……?」

「貸してあげる」

霊夢は自分が巻いていた首輪を外すと、早苗の首に腕を回すようにして、暗い翡翠色の髪をたくし上げた。

「今だけよ。あとで返して」

「……はい」

ぎちぎちと革のきしむ音を立てながら、指一本入る隙間を残して留め具が締まる。己の白い喉首にかけられていく黒い首輪を、早苗はどこかうっとり眺めていた。

「……申し訳ありません、勝手な真似を」

「いや、構わない」

首輪に指をひっかけて、早苗の後ろ頭をこちらに寄せる。

「あうっ……」

「期待に添えてみせろ」

「はっ、はい」

僕と霊夢に前後から挟まれるような形で、腰を半ば浮かせながら早苗は陽根の上にもたがる。ほのかに汗ばんだ手が、熱く腫れ上がった怒張の先端を探る。

「んっ……」

跳ね回る陽根をようやく手の中に収めると、早苗はゆっくりと腰を落とす。血の滾った海綿体に、しっとりとした柔らかな手のひらが心地よく触れる。やがて亀頭の先端が肉蕾の真芯をとらえ、鼻にかかった甘やかな吐息が漏れる。

「あ、あっ、あっ……」

しなだれかかるようにして霊夢の方に上体を預けながら、つぶりと肉穴が雁首までを呑み込む。汗の珠を白い肌に浮かべ、わずかに背中をそらせながら、ゆっくりと早苗はペニスの上に腰を沈めていく。

「んくっ……かはっ……あがっ！」

やがて、まろやかな尻がべたんと僕の下腹部に密着する。直腸の奥までを肉杭に穿たれて、早苗は息を詰まらせる。

「やーらしい」かちやかちやと首輪の金具を鳴らして弄びながら、霊夢がからかうようにささやく。「こんな簡単にご主人様を受け入れてしまうなんて、ちよつとゆるすぎるんじゃない？ あんたのお尻」

「簡単、なんてっ、ひぎっ」

「どうだ？」

こめかみのあたりに脂汗をにじませる早苗の耳元に口を寄せる。

「霊夢の指のほうが良かったか」

「おっ……」

左右からささやかれる猥言に耳朶を逆撫でされながら、いやいやをするように早苗はかぶりを振るう。

「おちんぼが、いい、ですっ！」

「そうか」

「霊夢さんの、指……じゃ……届かない、とこ、届いてますっ……！」

「あら」

霊夢が不服そうに口をとがらせる。

「さつきはあんなに喜んでくれたのに」

「ひあっ……！」

霊夢の指が、秘唇を割って早苗の股座に潜り込む。薄い肉壁越しに、指の腹が膣の浅いところをこすり立てるのが陽根の根元のあたりに感じられた。

「それ、そんなの……！　ら、めっ……」

「何がダメなの？」

「おしりと、おまんこ、一緒につ……」

だらりと霊夢の方に寄りかかりながら、指で前からこすり立てられる度に、脱力した体のなかで肛筋だけがひくひくと蠢動する。陽根の根元に食らいつく強烈な締め込みと、亀頭を柔らかく包み込む腸粘膜のぬくもりを、僕はそのまましばらく堪能する。

「お尻の奥、気持ちいいのね」

指先で責める手を止めずに、霊夢が早苗の耳元で問う。早苗はぎゅっと背中を縮こまらせたまま、こくこくと必死に頷く。

「いやらしい」

「だってえ……」うつろな目を被虐の色に染め、早苗は霊夢にしなだれかかる。「こんなの、はじめて」

「違うわ」

「……!!」

指で雛先を責め立てられ、早苗は腰をはねさせる。肉棒にふさがれて閉じることのできない尻穴が、きゅうきゅうと媚びるように陽根に粘膜を絡みつかせる。

「これがあるべき姿。ご主人様におちんぼを突っ込んでいただかなければ、糞をひるしか能のない糞袋だもの」耳に寄せていた顔を離し、霊夢は正面から早苗の顔を見た。「あんたも、私も」

二人は視線を交わし、どちらからともなくそつと唇を重ねる。その一瞬、二人の少女は彼女たちだけの王国へと引きこもり、世界を切り離してしまったかのように見えた。

「ご主人、様……?」

重ねていた唇を離して、二人が同時に僕を見る。

「さつきからずっと、頭がふわふわ、ぞわぞわわってして……」ときれときれに、早苗が言葉をつぐ。「イツてるのか、イキそうなのかも、よく……わからなくて」

「限界か?」

焦点の合わない目を左右に泳がせながら、早苗は大儀そうにくくと首を振る。指をねじ込まれたままの秘芯から、愛液とも小水ともつかない、生温かい何かがつと滴り落ち、僕の脚の上に広がっていく。

「しょうのない奴だ。勝手に俺の上にまたがっておいで」

「申し訳、ございません……」

「いや、いい」

首輪の上から腕を回すようにして早苗を抱き寄せ、首筋に唇で触れる。

「……上出来だ。よくやった」

二人の体軀を重ねて押し倒すようにして、姿勢を変える。尻穴を刺し貫かれたまま後ろからのしかかれる格好になった早苗が、荒く息を吐く。

「背中、大丈夫か」

息も絶え絶えに震える背中の方こう、受け身をとるような格好で早苗の体軀を受け止めながら、霊夢がうなずき返す。わざわざ口に出して尋ねるまでもないといった顔だ。

「ケツの穴にだけ集中している」

「ひッ……あッ……はいっ」

首輪を引っ立てるようにして、うなじをこちらに寄せる。汗でしとどに濡れた髪の下から、青い花の香りが立ち上る。雄をたまらなく興奮させる匂い。子供でもなく、熟れた雌でもなく。成熟の最後の段階にあつて、摘まれるのを今や遅しと待ち構えている果実の匂いだ。

「ひゃっ、あうっ、あっ、やっ……んっ！」

僕が腰を突くまでもなく、早苗はぎゅっと肩を縮こまらせたまま身をよじらせる。

「ほどほどにしておけよ」

指で膣口と雛先とを責め立てながら、早苗の胸を吸い立てていた霊夢に目をやる。

「だって、ほら」控えめだが形よく張った胸の先端にちろちろと舌を這わせていた霊夢が、小刻みに喘ぐ早苗の顔に顔を寄せる。

「こんなに、気持ちよさそう……」

「んむっ……」

霊夢が早苗の口を塞ぐ。口腔と、秘裂と、胸と、あらん限りの薄い粘膜をこすれ合わせながら、二つの肢体は同じリズムで震え、手繰るように快楽を求めて絡まり合う。それはまるで、二人で同じ一つの体を犯しているような錯覚さえ覚えた。

「少し奥まで入れるぞ」

「んっ……んんーっ……」

早苗の首根っこをつかんだまま、反対の腕で骨盤の上から抱え込むようにしながら、じりじりと腰を送る。

「きついか」

「い、ひえ……」

腸腔の奥深くをえぐられながら、早苗はふるふると首を振る。

「お、お、ぐりぐりって、され、るの、しゅ……すき、でしゅっ……」

ようやくのことで口を塞いでいた舌からは解放されたが、ねぶり尽くされた舌が痺れているのか、背中をえぐる圧迫感に脳が麻痺しているのか、ろれつが回っていない。

「こうか？」

「……ひゃあうっ……！」

ぐっ、と下腹に力を込めてやる。膨れ上がった陽根に腹腔を突き上げられた早苗は、悲鳴を上げて背中をのけぞらせる。

「抜いていくぞ」

「へあ……？」

「しっかり、お尻の穴を締めていて」目を白黒させる早苗を腕の中で抱くようにしながら、霊夢がささやく。「うんちを我慢するような感じで、おなかに力を入れるの」

言われるがまま、早苗がきゅっと下腹に力を込める。

「無理矢理うんちさせられてるみたいで、気持ちいいでしょ」

「あはっ……」

笑っているのか、苦痛に喘いでいるのか。霊夢の腕の中で、早苗は犬のように舌を垂らし、たまま息を喘がせる。

「ここ、わかる？」

肛門から陽根が抜けるぎりぎりのところまで腰を引くと、霊夢は早苗の柔らかな肉壁越しに亀頭に触れた。

「お……ひん、ほ……？」

「そう」

腸内にねじ込まれたままの剛直の輪郭をなぞるように、霊夢は指の腹で早苗の柔肉を撫であげる。

「この、一番太くなっているところ……ここ」

薄い肉壁を前後から責め立てられ、汗の珠をにじませながら、早苗はけなげにうなずいてみせる。

「おまめ、はじくと……きゅってするでしょ？」

「ひんっ」

「その感じ、忘れないで」

「ふむ」

陰核を爪の先で転がされ、痙攣するように尻の穴で陽根の一番太い部分をきゅうきゅうと締め立てる早苗をよそに、霊夢の方に向けて口角を持ち上げてみせる。

「教え方が上手だな」

「ご主人様に仕込まれましたから」

「……さなえ、は」

嫣然と微笑む霊夢の腕の中から、早苗がさがるように背後を仰ぎ見る。

「さなえの、おしりの、あな、気持ちいい……ですか……？」

「ああ」

「ひっ……ぎっ……っ！」

僕はうなずき、またゆっくりと腰を送る。やわやわと剛直の根元までを肛肉に吞み込みながら、背中を震わせて圧迫感をこらえる早苗のうなじを、手のひらでそっと撫でる。

「気持ちよくしようにとしてくれるんだな」

「あっ……んっ……」

涎と涙をこぼしながら、早苗が声を震わせる。

「さなえも、うれしい……ですっ……!!」

「あらあら」

僕の手の上に手を重ねながら、霊夢が相好を崩す。

「妬けるわね」

「野暮は言うなよ」

「はいはい」

ひしと抱き合うようにしながら、二人が僕を見る。

「早苗」

「はっ、はひっ……」

「今の感じでいい。動いてやるからケツを締めろ」

口で返事をするより早く、尻の穴がきゅつと僕の陽根を締め上げる

「霊夢」

「はい」

「支えていてやれ」

「はい」

「あはっ……」

感極まったように、早苗は甘えた息を漏らす。その口を、指で秘唇をかき回しながら、霊夢がふさぐ。

「出してやる。尻で飲め」

ふさがれた口を苦しうにしながら、こくこくと早苗が必死に首を振る。口と女陰とをなぞりあげられるたびに、尻穴がきゅうきゅうと痙攣していた。

「きたぁ……」

僕と霊夢に挟み込まれるように抱かれたまま、早苗は腸奥に放たれる精水に背中をのけぞらせている。

「ご主人様のおせいし、おなかの奥で……びゅーっ、びゅーっ……」

精液を吐き出しながら暴れる陽根が腹の奥を叩くのが心地良いのか、夢でも見るような目で早苗はうっとり中空を眺めていた。

「……いっぱい出してもらったのね。嬉しそう」

「はい」

「あんたの息から、口から、ご主人様の匂いがしてくる……」

早苗の肩を抱きながら、霊夢が微笑む。

「ありがとうございます……ございませう……さなえの、おしりに、おせーし、いっぱい……」

雄の精液が直腸からしみこみ、少女の体を血の中から汚していく。排泄器官に射精される屈辱を悦楽に変えながら、早苗は射精の余韻に浸っていた。

「霊夢さんも、ありがとー……」

「……べつに」

「えへへー……」

理性のタガが外れた目で、少女たちは互いを見つめながら口づけを交わす。

「これで……霊夢さんと、おんなじ……ご主人様の、奴隷になれましたか……?」

「まだよ」

「まだだ」

好き放題に腹の中で暴れまわった陽根を引きぬくと、早苗は甘えた悲鳴を立てて小さく震わせた。

「あはあ……」

霊夢に抱かれたまま、早苗が背後の僕に蕩けた視線を送る。

「早苗のお尻にいれたおチンポ……早苗に掃除させるんですね……」

「無理には言わんが」

「いえ……早苗、ご奉仕いたします」

ふるふる、と静かに早苗はかぶりを振り、こちらを向く。精液のあふれる尻を向けられた霊夢が、背後で無言のまま舌を伸ばしていた。

「奴隷としての礼儀です」

「ふふっ……」

一通りの後始末が終わり、涎だけを絡ませた陽根にしゃぶりつく早苗の傍らで、霊夢は恨めしげな視線を向けていた。

「だめですよ……こんどは、んむ、わらひの、ばんでふ」

「……今は譲ってやれ」

「むう」

早苗の尻からこぼれた白濁を柔らかな口元にこびりつかせながら、霊夢が僕を睨む。

「……早苗の仕事だ」

霊夢はしばらく口を尖らせていたが、やがて引き下がり、竿先を早苗に譲って自分は裏筋から陰囊の方へと舌を這わせていく。

「あむ」

肉と肉のぶつかり合う間で酷使された陰囊が、柔らかな口腔へと吸い込まれる。しわの一つ一つをなぞるような舌使いが鈍く痛む睾丸に心地よい。

「……えへへ」

「？」

顔と顔を並べてペニスをしゃぶりながら、照れたように早苗が笑う。

「これで、本当に一緒ですね」

「……なにがよ」

「こうやって、霊夢さんと並んで、ご主人様にご奉仕して……やっ」と

「口がお留守になってるわよ」

「やんっ……」

目の前の陰囊を舌でくすぐりながら、霊夢は器用に早苗の脚に脚を絡める。目は僕の股座

を中止したまま、早苗の方を見ようともしない。唐突に下腹と下腹をすりあわせられ、早苗は甘えた声を立てる。

「さっきまでびいびい泣いてたくせに」

「それは、そのっ……あんっ……！」

松葉崩しの格好で緋貝をこすり立てながら、霊夢は早苗の腰に腕を回す。

「あんたのここ、まだ熱くて、ぬるぬるしてる」

「んっ、駄目え……っ」

散々嬲られたばかりの尻穴を無遠慮にまさぐられた早苗が、お返しとばかりに霊夢の尻たぶを割る。

「んんっ」

「霊夢さんだって、お尻、きゅってして……かわいい……」

「遊んでるが、掃除は終わりか？」

尻の谷間から精液をあふれさせながら、うっとり互いの下半身を絡ませあう二人に、僕は肩をすくめてみせる。眼下で繰り広げられる少女たちの媚態に当てられて、いつしか陽根はみたび赤黒い鎌首をもたげている。

「はう……」

降々とした剛直をうっとり眺めていた早苗の眼前で、霊夢が亀頭に口づける。二人は目配せを交わし、今度は早苗が陰囊に吸い付く。

「んむ、あむっ」

「んっ、ずちゅっ……」

再び目配せが交わされる。また二人は役割を入れ替え、無言のままペニスの先端を譲り合つては、仔牛が乳を吸うように吸い立てる。実に麗しい光景だった。

「ご主人、さまあ……」

何度目か、玉と竿を譲り合つて吸い立てた後、早苗が甘えた声で僕を見上げる。

「このまま……さなえのおくちに、いただけないでしょうか……」

「ふむ」

傍らの霊夢に視線を移す。

「どうだ？」

「ご主人様の、お心のままに」

「いいだろう」

物欲しげに舌を出して早苗の眼前に、剛直の先端を向ける。

「口で受け止めろ」

「はい……！」

「ご主人、さま」

飛び上がらんばかりに満面の笑みを浮かべる早苗の横で、霊夢がもの悲しそうに眉をひそめていた。

「霊夢には、ご命令を頂けないのでしょうか……？」

「……そんな目で俺を見るな」

ぽふん、と軽く、霊夢の頭の上に手を置く。

「尻を舐めろ。手伝ってやってくれ」

「……はい」

寄せていた眉を緩めて、霊夢はほっと息をつく。絡み合った膝と膝の上をまたいで仁王立ちになった僕の股座に、前後からゆっくりと柔らかな舌が近づき……触れた。

「んむ、んむ……んっ」

「あむ、じゆる、ずちゅっ……」

早苗の唇が、熱心に剛直を吸い立てる。往復するだけの動きはいささか単調だが、歯を立てないように、熱く潤んだ口腔の喉奥にまで陽根を呑み込みながら、けなげに口で奉仕する。一方の霊夢はといえば、尖らせた舌で僕の尻穴をくじりたてながら、手のひらでやわやわと陰囊を支えるようにもみほぐす。会陰のあたりに伝わるぬくもりがじんわりと温かく、気を抜くと腰が碎けてしまいそうになる。

「ぐっ……」

今日三度目の勃起だというのに、あつという間に射精感が立ち上り始める。前後から与えられる肉体的な快樂以上に、霊夢と早苗、足下でうづくまる二人にともに奉仕させているという状況が、僕の脳を舞い上がらせる。

「んっ、んっ、んむっ……!」

「んちゅっ、ちゅっ、んっ」

早苗の後ろ頭をつかんで、半ば性具のように扱きながら腰を送る。呼吸もままならないなか、目を白黒させながらも、早苗はただひたすらに舌と唇で剛直の輪郭をなぞっていた。前後からこぼれた生暖かい唾液が、絡まり合って僕の膝の方へとしたたり落ちる。

「出す……ぞッ……!」

あつけなく、限界が訪れる。ふるふると小刻みに顎を揺らし、早苗が口腔に吐き出される精を待ち構える。くにくにと舌を突き立てるようにして僕の尻穴を吸い立てながら、霊夢が会陰を指の腹でくすぐる。

「んっ……」

二人が同時に、しがみつくようにして僕の腰に腕を回す。柔らかな舌の上で、心地よい痛みとともに、どくんどくと脈打ちながら、金玉の中で作られたばかりの青臭い汁が吐き出される。

「まだ飲むなよ」ふらつきそうになる膝を押さえて、僕は二人の上から体をどかす。「二人で味わえ」

口をきゅつと結んだままの早苗に、霊夢がゆっくりと顔を近づけ……互いに伸ばした舌の上で、青白く濁った汁を絡ませながら、二人は唇を重ねる。そのまま少女たちは、再開を懐かしむように互いの肩を抱きながら、舌の上で屈服の証を分け合うように精液を転がしていた。

やがて、二つの喉がこくと小さく揺れる。

「口を開ける」

無言のまま、二人は僕の方に口を開けてみせる。赤い舌と白い歯だけが鮮やかに濡れた光を放っている。欲望の痕跡は胃の腑へと飲み下され、陰も形もない。

「そのまま、開けている」

諾々と、舌を出して口を開く二人に向けて、僕は背中を震わせる。尿道に残ったゲル状の残滓を押し流しながら、生暖かい小水が少女たちの舌を、口を、髪を、体を汚していく。

「あはっ……」

「あう……」

二人は互いの手を握り、身を汚す生暖かい液体をよけようともせずに浴びながら、僕が放尿を終えるのを陶然と見あげていた。

風呂の焚口の傍ら。薪割り台の上に座って、僕は火をくべている。杉の燃える、どこか心和む甘い匂いが夜風に運ばれて流れていく。

風呂の中では、二人が湯を使っている。低い声で何事か、ぼつりぼつりと話しているが、湯気にくぐもってこちらまでは聞こえてこない。あふれた湯が時折、さざなみのめいた水音を立てて流れていく。汗と涙と、精液と小水の残り香を洗い流しながら。

「そのくらいでいいわよ」格子のかかった窓越しに、風呂の中から霊夢が声をかける。「ちょっと焚きすぎ。のぼせちゃうわ」

「ん、すまん」

「……煙草、吸わないでよ」

ちようど、一服つけたいと思っていたところだった。僕は煙草入れをポケットの中に戻すと、火ばさみで火の付きかけた薪を一本出し、熾き火を平らに均す。

「早苗、泊まってくって」

「布団、出すか？」

「……私の部屋で一緒に寝るわ。あなたは客間で寝て」

「わかった」

それだけ言うと、再び霊夢は湯船の中に身を沈めていった。板子一枚隔てて、早苗が何事か話しかけているのは聞こえるが、それ以上僕には見えも聞こえもしない。泣いているのか、笑っているのか、あるいは寝ているうちに僕を殺す算段でも立てているのか。僕の知るところではない。それは彼女たちの、彼女たちだけの問題だ。

ぎい、と床のすのこをきませながら、二人の気配が脱衣場の方へと消えていく。奴隷に

身をやつした王女たちが、体にこびりついた垢をきれいに洗い落として、彼女たちの王国へと帰還する。陳腐だが、我ながらなかなか的を得た連想に僕は一人苦笑する。朝が来れば、二人の巫女は凜とした犯しがたい佇まいでまた僕の前に現れるだろう。

風呂場の明かりが落ち、宵闇があたりを包むと、僕は熾火のかけらを一つ取り上げて煙草に火をつけた。

元来、寝起きは良いほうではない。だから、目を覚まして枕元に見目麗しい少女が二人か
しずいていた時は、まだ夢を見ているのだと思った。それとも、やはり眠っているうちに、
何の痛みも感じずに僕は息の根を止められたのだろうか？

「……ここは、天国か」

わずかに開いた障子から差し込む日差しが目まぶしい。寝ぼけまなこで見上げる僕に、
霊夢はどこかあきれ顔で肩をすくめ、早苗は困ったように苦笑しながら、互いを見かわす。
「ウチじゃあ、天国とか地獄とか、そういうのはやってないの」

「そうか」

それもそうだ。どのみち、そういうものがあるとしたら僕が行くのは地獄の方だろう。昔

の人はよく考えたもので、女の子に不埒なおこないを働いた場合、その内容ごとに分かれた地獄が用意されているらしい。

「……朝からどうした、二人して」

夢も見ないで泥のように眠っていたが、心地よい疲労が体の芯に残っている。重たい体を起こして布団の上に座り、二人のほうに向きなおる。二人はきちんと身なりも整え、居ずまいを正して座っている。朝の光の中で、赤と青の装束がいつにもまして目に鮮やかだった。

「……手、出して」

「？」

「渡すものがあるんです」

二人とも表情は穏やかだが、口ぶりはいつになく真剣だった。乞われるまま差し出した手を覆うように、二人は順繰りに手を重ねる。きゅ、と軽く握りながら、二人の手から何かが僕の手の中に滑り落ちる。

「……お守り……？」

「そう」

手を開く。お守りが二つ……いや、お守りは神様が宿っているから、二体と数えるんだっ

たか。二人の装束と同じ、目にも鮮やかな赤と青の布で作られているが、何のお守りなのか、何も記されていない。

「ご利益観てきめん面、ですよ？」

「……なんのご利益があるんだ？」

巫女さんがお守りを授与してくれる。それはごく当たり前といえれば当たり前なことなのだが。お守り袋を手したまま訝しむ僕をよそに、二人は悪戯っぽく口元を和ませ、視線を交わす。

「それを持っている人は、私たちになんでもいうことを聞かせられるの」

「なんでも、ですよ」

くすくすと、二人の巫女は軽やかに笑う。まるで天気の話でもするような気軽さで、己の運命を僕の手の中に投げ出しながら。

「朝に巫女を知らば夕に死すとも可なり、か」

「……?」

「独り言だ」

怪訝な顔をする二人の方に向けて、僕も膝をそろえて座り直す。

「僕がもっていて、いいんだな」

「はい」

二人は声をそろえて答える。目には何の迷いも銜いもない。

「不肖、博麗霊夢」絹糸のような髪を畳の上に這わせて、霊夢が額づく。「御身の婢として如何様にも奉り仕ります」

「同じく、東風谷早苗」並んで、早苗が畳の上に指をつく。「不束者ながら、ご主人様にご奉仕相勤めます」

「兩名ともども、末永く……」

「……ご主人様のお情けを賜りますよう」

口上を述べ終わると、二人はそのまま微動だにせず、威儀を正して伏していた。畳に顔をこすりつけるようしながら、不思議とその居すまいに卑屈の匂いは影も形もない。むしろ、何事か崇高なものに身をささげたような、奇妙な厳かさを細い肩のあたりに漂わせていた。

「顔を上げてくれ」

まるまる一呼吸おいて、二人の巫女が目を上げる。

「よろしく、頼む」預かった二体のお守り袋を手の内に握りしめる。まだそこにあることを確かめるように。「……ありがとう」

「水臭いわね」

顔を上げた霊夢が、相好を崩す。

「こう、堅苦しいのは、どうにも……な」

「時には礼儀と形式が必要になるのよ」いつもの笑顔。いつもの霊夢。「私たちの商売では、特にね」

「はあ……」

傍らで早苗が、肩の荷が下りたように肺の中の息を吐く。

「緊張しましたあ……」

「練習した甲斐があつたじゃない」

「なんで言っちゃうんですかあ」

霊夢の軽口に、早苗は口をとがらせる。いつもの早苗。いつもの霊夢。いつもの二人。屈託なくじゃれ合う二人を眺めているうちに、自分でも気づいていなかった緊張がすっとほぐれて消えていくのを感じた。

「……さしあたって、一つ頼みがある」

「頼み、でいいの？」

「頼み、だ」

つとめて真顔のまま、僕はうなづく。

「……いいわ。何？」

「腹が減った」

「……？」

頃合いを見計らったように、胃がぐるぐると情けない音を立てた。昨夜は結局何も食べずに寝てしまった。興奮と緊張ですっかり忘れていた空腹が、気が緩むに連れてじりじりと胃の奥からせり上がってくる。

「ふふっ」手の甲を口元に当てて、霊夢が愉快そうに笑う。「何それ」

「このままじゃ飢え死にする……君らの大事なご主人様が」

「それは困るわ」

「だろう？」

「まあ……そうね。早苗、手伝って」

「はいっ」

「僕は……」

「まずは顔を洗って、着替えてきて」

「……あい」

素直にうなずき、軽い足取りで台所の方へ消えていく、二人の背中を見送る。それは僕には、そんじょそこらの天国よりも得難い光景であると思えたのだった。

〈体験版はここまでです〉

